



【ものづくり・人づくり・地域づくり】2018 年度活動テーマ ～素材を活かしてわが家の味～

# 「脱原発！！」

# 「ふくしまを忘れない！！」

# 「持続可能なエネルギー！！」

# 今後続く、私たち大人の責任！！



桜井 前南相馬市長



東海第二原発は、この11月で運転開始から40年が経ちます。20年運転延長、再稼働の岐路の中、9/1(土)に行われた「東海第2原発再稼働 STOP!! 茨城大集会」参加してきました。組合員、役職員を含め総勢35名でバス1台チャーターし、生協本部のある守谷を出発。行きのバスの中では、大石顧問より東日本大震災当時の生協の様子などの話がありました。

### 2018年9月の予定

#### ●生協基幹運営／地域活動・催し●

- ・ 9月ゴンタの丘「常総っこ応援団」は毎週木曜日活動しています。試食会は9月27日に行います。
- ・ 9月の青空マルシェはお休みします。
- ・ 9/15(土) ゆるカフェ in つくば
- ・ 9/21(金) 歴史を学ぼう - 未来のために (常総生協本部)
- ・ 9/22(土) 生産者プレゼン会 (常総生協本部)
- ・ 9/25(火) おいしさ語ろう会 (つくば市・吾妻交流センター)
- ・ 9/26(水) 定例理事会
- ・ 9/28(金) 役職員研修会
- ・ 9/29(土) ゆるカフェ in 取手

#### ●提携・協同・連帯企画●

- ・ 9/22(土) 坂東ほこてんイベント出店、生産者プレゼン会開催 (常総生協本部)
- ・ 9/29(土) 守谷商工会まつり出店

2018/9/6 AM3:08 ころ北海道で震度6強の地震がありました。大規模停電が起こっている状況です。ホームページ、facebookにて生産者の安否・状況報告を配信しています。

## 『東海第二原発再稼働 STOP!! 茨城大集会』に参加して。。。



常務理事 木内 和彦

### 【震災当時の常総生協の決意】

組合員、役職員を含め総勢35名でバス1台チャーターし、生協本部のある守谷を出発。行きのバスの中では、大石顧問より東日本大震災当時の生協の様子について話がありました。

原発事故が起これば、地元の生産者、組合員と築き上げた地産地消の活動ができなくなり、常総生協を解散する決意でいた。1990年に起きた「JCO 臨界事故」を教訓にし、モニタリングポストの情報を逐次収集。組合員にはこの地から避難することも含め、外出時の対策など呼びかけた。また、生産者には圃場にブルーシートを掛け、これ以上放射能に汚染されないようお願いした。組合員がこの地の残っている間は供給を止めるわけにはいかない為、労働安全上の注意として職員向けに安定ヨウ素剤の購入を試みるがダメ、海産物でお世話になっているリアスさんをお願いし、とろろこぶ・おしゃぶり昆布をあるだけ送ってもらい、職員に食べさせながら供給を続けた。その一方、職員の避難の順番、子どもがいる職員から行うことも検討していた。

また、災害時には「生協の食材、物資は地元を提供し、戸頭店の商品、組合員に届ける為の飲料水は宮城へ支援物資げと届け、被災地支援を続けた。」と話されました。

### 【ふくしまを忘れない】

会場は、900名程入るホールをいっぱいになり、立ち見も出るほどで、東海第2原発の20年延長、再稼働に対する関心の深さを感じられた。また、地元、近隣の方だけではなく東京や東北、東海地区からの参加者もおり、原発事故の被害の広域性も感じられた。

福島からの訴えとして、桜井前南相馬市長から事故当時、政府から何が起きたか連絡もなく、住民を避難させることができなかった。連絡が

来たのが3/22、5月になりようやく市庁舎に新聞が届くほどの状態で、情報が滞っていた。そして、当時の政府の「原発事故は終息した。」の発表に住民は『棄民』されたと心を苦しめていた。

双葉町から茨城県古河市に避難している大沼さんは小学生の時に作った標語「原子力 明るい未来のエネルギー」が町に採用された方で、その原発によって一瞬に故郷を失った苦しみを話されました。まだ、線量が高い状態だが避難区域が解除され、家を除染するか解体するかを迫れ、解体することに仕方なく署名した。避難区域が解除されるということは、自主避難者になり今後の生活の基板に不安を感じている。

二人の方から「原発は、人の命を危うくし、環境を破壊する もっと高いエネルギーだ。福島の現実を見てください。福島をなかったことにしないでください。」と力強く、訴えていました。

### 【経済優先の国の政策】

市町村の首長、生協連、農協などの賛同人、団体も参加されており、元日本医師会会長の原中氏からは、国が発表している放射能の数値がアメリカ、ドイツが空中から調べた数値の半分だったこと、除染活動に従事した作業員の癌の発生率が高いこと、福島は甲状腺癌がよその地域に比べ70倍ふえたことなどが発表されており、政府は国民の幸せを考えているのかと訴えておられました。

前東海村村長の村上達也氏は、東海村(茨城県)は当初、原子力研究施設建設ということで誘致に参加したが、いざふたを開けると原子力発電所が作られ、次々と原子力関係の施設が作られていき、「国に騙されていた。また、東海村を地盤が弱い上に周辺が人口密集地で一番原発を建ててはいけない場所だ」と訴えていました。

村上村長が退任する当時、田中前原子力規制委員会委員長と親交があり、「原発は30年運転を前提に設計されたもの」「電源ケーブルの全面交換は難しい」と話されたそうです。今、20年

延長に対して問題になっている「難燃性ケーブルに交換」が無理なことが分かっていて延長申請をする日本原電、それを許可する規制委員会に、私は何を考えているのか解りません。そもそも30年の運転で設計されたものを倍の60年、運転させることを考えること自体、福島第1原発の事故の教訓が生かされていない、福島をないものとしようとしている感じがしました。

### 【ふるさとの喪失、子どもたちの未来の喪失】

最後に河合弘之弁護士より原発を反対する理由として、重大事故を発生させた時に国を滅ぼしかねない、国民を滅ぼしかねないことになること、使用済み核燃料の処理が世界中どこもが正しくできなく、後世にあと処理を残してしまうことを挙げていました。

また、福島第一原発の事故は、事故当時、風が海を向いて吹いていたことにより85%の放射能が海に落ちたこと、4号機の核燃料プールに工事のミスより隣のプールから水が供給され、火災を逃れたことの2つ幸運に恵まれて現在の被害状況に収まっている。当時の菅首相が内閣府原子力委員会に最悪のシナリオをシミュレーションさせたら、170 km圏内は強制退去、250 kmは任意退去、東日本が壊滅状態なるというレポートをみて驚愕したことを話されました。

### 【「再稼働反対!!」私たちの思いをぶつけよう!】

大集会が終わり、参加者は熱い思いを胸にし、「原発いらない!!」「再稼働反対!!」と多くの方に私たちが思いをぶつけるようと水戸の街でアピール行動(デモ)を行って来ました。

改めて原発事故の怖さ、今なお苦しんでい人がいること、東海第2原発の危険さを痛感した会になりました。

「脱原発!!」

「ふくしまを忘れない!!」

「持続可能なエネルギー!!」

今後も続く私たちの課題、責任として持って帰って来ました。



### 商品部 稲垣 芳

#### ●他人事ではなく「自分事」に!

集会では南相馬の前市長桜井さんのお話が、とても生々しく、福島原発事故による被害の実態が全国的には知られていないと思ったし、本来はもっとたくさんの方が聞いて「自分事」と思えるようにならないと、また同じ様な事故が起きてしまうと思いました。デモ行進も水戸市街地を歩くのも久しぶりだったけれど、職員みんなで常総生協のユニフォームを着て歩くのは頼もしく感じました。往復のバスでの大石さんのお話や皆さんの話も聞けて、良かったです。

### 商品部 横関 純一

#### ●若い世代に広げていきたい。

昨年引き続き脱原発の集会に参加して、原発事故が及ぼす影響の大きさを改めて感じました。今回の内容で一番印象に残ったのは元南相馬市長の桜井さん、双葉町から非難した大沼さんの訴え。事故から7年以上が経過しても、被災した方の心の傷は全く変わらないという思いがひしひしと伝わってきて思わず涙が出そうになりました。

「捨てられた民」という言葉がありましたが、フクイチの事故は国内のどの原発でも起こりうる事、そう考えると東海第二の事故を想像するだけで取り返しのつかない被害が出ることは明らかです。そういったいたって単純で簡単な答えが捻じ曲げられてしまう経済優先の世の中はどうかとも感じます。年に1回(本当はこれでは少ないとは思いますが・・・)ですが、こうして実際に被災された方の言葉を直接聞き、同じ思いを持った人たちと一緒に声を上げることがとても大切だと感じます。

残念なのは、やはり会場に集まっていた参加者の年齢層が高いこと。小さな子供を持つ親御さんたちに、同年代である自分がどうやってこの経験を広げられるかを考えていきたいと思えます。

## 9月4回鮮さんまを食べるなら今！！今年もやります「女川の鮮さんま」

今年は豊漁と言われている秋の味覚の代名詞『さんま』ですが、記録的な大不漁となった昨年を超える水準で水揚げ量は推移しているものの、ピーク時に比べればまだまだ水揚げ量は少なく、浜値も540円/kg(9/1時点)と高値傾向になっています。近年の不漁には公海上での外国船(中国・台湾)の漁獲量の増加や地球環境の変化による海水温の変動など様々な要因がありますが、やっぱり『秋はさんま』という事で今年も鮮さんまを9月4回、10月1回でお届けします！！特別注文チラシにて企画しています。

### ◆女川の状況

2011年の震災で大きな被害を受けた千倉水産加工販売の女川工場、2015年には震災前以上の加工能力を備えた新工場も完成し女川さんまの復活に向け動き出しました。しかし、震災の影響から女川地域の住民登録数も震災前の6000→5000に減ってしまい、新規住民もほとんど増えていないため高齢化が進んでいます。その為、現在でも工場のスタッフが思うように集まらない(本来必要な人数は40~50名ですが、現状は22名。内8名は海外からの研修生に頼っている)という現実があります。工場自体の製造量も震災前の6割までしか回復していません。建物など一見すると復興は順調に進んでいるように感じますが、被災地の本当の意味での復興には多くの課題が残っており、長い時間が必要です。



### ◆近年のサンマ漁の状況と今年の女川の様子

ご存知の通り、2016・2017シーズンは記録的な大不漁となりました。不漁の要因としては地球環境の変化による海水温の変動など諸説ありますが、超大型と言われる外国船(中国・台湾等)による公海上での漁獲量の増加が著しい事も大きく影響しています。日本のさんま漁獲量は1958年の約57万tをピークに年によって増減はあるものの20万t以上をキープして推移してきました。しかし、外国船の漁獲量の急増に伴い2016年には約11万t、2017年至っては過去最低となった1969年以来初めて10万tを下回る低水準となりました。その結果、今まではマグロ養殖や水族館の餌用として使っていた小さいサイズのさんまを加工用に使わざるを

得ない状況にまでなっていました。

では今年のおさんまはどうでしょう？昨年はさんまの漁獲シーズン中に女川港に水揚げがあったのはたった6日間のみでしたが、今年はほぼ毎日コンスタントに水揚げされています。水揚げの総量はまだまだ少ないものの、現時点では今年も遅配・欠品せずにお届けできる見通しです。

### ◆千倉水産のさんまは「漁獲日・身崩れなし」を重視してお届けします。

今年の鮮さんまは水揚げ翌々日のお届けとなります。一般的には、水揚げ●日という点が重視されますが千倉水産のさんまは『漁獲日重視』というのが特徴です。さんま漁に出る漁船は、出来るだけ一度の出漁で船のダンベ(漁獲した魚を氷漬けにして入れておく大きい風呂桶のような水槽)満杯にして帰航しようとします。そのため、船によっては水揚げされた時点で実際に漁獲した日から数日経過しているという事もあります。また、漁獲した順にダンベに入れていくため、最初に漁獲した魚は後に漁獲した魚を上に乗せていくので多少なりとも身が潰れてしまう可能性もあります。



### <千倉水産のさんまは？>

- \* 船を選んで、漁獲日ができるだけ近いさんまを買い付け。
- \* ダンベの表層部分を網ですくって身崩れのない良質なさんまだけを選んでいきます。
- \* 水揚げ当日の朝に買い付けたさんまは、女川港の目の前にある千倉水産加工販売の女川工場にてすぐに選別、パッキング・氷詰して出荷！！

### ◆食べて応援、さんま3500尾食べつくそう！！

まだまだ厳しい状況が続いている中で毎年生協にさんまを届けてくれている千倉水産加工販売の女川工場、旬のさんまを食べることで応援しましょう！！今年も9月4回、10月1回の企画で3500尾の消費を目標に取り組みます。供給担当はもちろん、職員も一丸となっておすすしめしますので、組合員の皆さんもおすすめのさんまレシピや生産者へのメッセージなど、是非お寄せください。